

LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学
学習支援センター

2024 No.39

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

学習支援センターの不易流行 … 1 特集 まなびコモンズのグループ学習ゾーン … 2 第78回 LSCドキュメンタリー・アワー開催報告 … 5
大学教育学会 第46回大会 参加報告 … 6 LSC 資料紹介 … 7 新任学習アドバイザー 挨拶・<学び★サプリ>運を味方にする … 8

学習支援センターの不易流行



○ 学習支援センター次長
馬場崎 賢太

「吾輩は猫ながら時々考える事がある。教師というものは実に楽なものだ。人間と生まれたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら

猫にでも出来ぬ事はないと。」

これは夏目漱石の『吾輩は猫である』の一節です。夏目漱石の時代から百数十年、「学校」がこんなにも忙しそうな人々に溢れる場所になっていると、誰が想像できたでしょうか。そもそも、「school」という英単語の語源は古代ギリシャ語の“schole”であり、その意味は「暇」だそうです。この壮大な時間を跨いだ学校現場のビフォーとアフターの変化の度合いは「劇的」などという言葉をもってしても足りそうにありません。令和の現代では「学校」で働く人々は、とにかく忙しいのです。2014年度まで学習支援センターで学習アドバイザーをしていた私が、この2024年度、再び学習支援センターで働く機会を得ました。夏目漱石ほどの昔ではないにせよ、10年前と比べるとセンターの様子は確実に変わりました。そして、変わっていない、とも同時に思います。

不易流行という言葉があります。松尾芭蕉の言葉で「不易」とは「世の中が変わっても変えるべきではないもの」、「流行」とは「世の中の変化に伴って変えていくべきもの」を意味します。「不易」と「流行」は、根本は同一であり、両者ともに必要なものなのです。広島修道大学における「不易」は「道を修める」という建学の精神であり、学習支援センターにおいては「一人ひとりの学びをサポート」とい

うモットーでしょう。10年の間に場所が変わり、スタッフが変わり、大学を取り巻く状況も変わりましたが、今でも「変わっていない」と懐かしさを感じるのはこの理念が共有され続けているからです。一方で、時代の変化に合わせて変えていくべき「流行」はどうでしょう。社会環境が急速に変化する現代社会では、知識の量だけでなく、変化に対応できる能力、つまり、自ら学びに向かう力を持った人材が求められるようになりました。学習支援センターはより広い空間とより整った設備をもつ「まなびコモンズ」へ引越し、学生の自主的・協同的・対話的な学びを可能にしました。学習アドバイザーが実施するワークショップやスタディグループはその一例です。また、センターが開催する「教育力アップセミナー」や「LSCセミナー（かつての初年次教育セミナー）」で共有された現代的な教育の手法や考え方は、着実に本学教職員の教育改善の視座を高めてきました。

2024年度、本学では全学的にTA・SA制度が導入されました。学ぶ立場の学生であり、教職員のパートナーとして教育を支えるTA・SAの存在は非常に魅力的です。彼ら彼女らは教員にも職員にもできなかった役割を果たし、学生中心の大学づくりに貢献してくれていると考えています。本学は伝統的に教職協働を重んじてきました。これからは、教員・職員・学生の協働が本学に新たな変化をもたらしてくれるでしょう。

10年後の広島修道大学はさらに想像もつかないほど変化していることは間違いありません。その時、今を振り返った未来の自分が変化に驚くと同時に懐かしさを感じられるよう、忘れてはならない理念を大切にしながら目の前の新たな挑戦に取り組みたいものです。

特集

まなびコモンズのグループ学習ゾーン

協創館（8号館）に入ってすぐの学習エリア「まなびコモンズ」は、個人で利用するゾーンとグループで学ぶゾーンがあります。今回はグループ学習ゾーンに焦点を当て、活用の様子をレポートします。

スタディグループ

“一人ひとりの学びをサポート”がモットーの学習支援センターですが、グループ学習での学びもサポートしています。共通の目的を持つ学生たちが自発的にグループを組み、時にアドバイザーのサポートを受けながら学びを深める「スタディグループ」も、まなびコモンズで活動しています。

まなびコモンズを利用した勉強会



法学部法律学科3年 飯塚 祥人

私はE.S.S.サークルの部長を務めています。E.S.S.とは English Speaking Societyの略で、英語を使った様々な活動を行っています。E.S.S.サークルは広島修道大学で唯一の英語サークルであり、英語が得意な人、好きな人だけ

ではなく、苦手な人も多く入部しています。現在、32名の部員が所属しており、様々な学部、学年からメンバーが集まっています。今年度は留学生との交流に力を入れており、積極的に国際交流イベントに参加しています。

私たちE.S.S.サークルは、5月にサークル活動として「まなびコモンズ」でTOEIC勉強会を行いました。今回、勉強会を開催することになったきっかけは、私自身が学習支援センターの学習アドバイザー藤田さんにTOEICの個人指導を受けていたことです。いつもとても分かりやすい指導をしてくださるため、サークルでの指導をお願いしたところ、快く引き受けてくださいました。広島修道大学では7月と1月の年2回、大学内でTOEIC-IPテストを受けることができ、多くの学生がTOEICの勉強に力を入れています。そのため、今回の勉強会には7月の試験に向けて多くの部員が参加しました。勉強会は、TOEICの公式問題集を解き、藤田さんに解説していただく形で進みました。最初は皆、慣れない問題に苦戦している様子でしたが、藤田さんが一人一人に丁寧なアドバイスや解説をくださったおかげで、部員たちは納得した表情を浮かべていま



した。また、部員たちからも藤田さんに積極的に質問しており、良い雰囲気勉強会を行うことができたと思います。

今回、TOEIC勉強会で使用した「まなびコモンズ」は学習しやすい環境ですが、意外と利用したことがない学生も多いかもしれません。実際、普段の大学生活において「まなびコモンズ」を利用する機会は少ないため、今回の勉強会で初めて利用した部員も多かったようです。「まなびコモンズ」は協創館1階にあり、個別学習ゾーンとグループ学習ゾーンがあります。今回はグループ学習ゾーンを利用しました。グループ学習ゾーンは広く開放的な空間で、円形のテーブルに皆が向かい合って座ることができるので、質問や意見の共有がしやすいと感じました。そのため、今回のような大人数での利用に適していると思いました。

今回のTOEIC勉強会を通して、多くの部員がスコアを伸ばすことができ、「やって良かった」との声もたくさん聞くことができました。私自身、今回の勉強会のおかげでスコアを100点伸ばすことができ、成長を実感することができました。後期の活動でも部員全員がさらにスコアを伸ばすことができるように、継続して行いたいと思います。

学習アドバイザー 藤田 香織

E.S.S.サークルの皆さんは「ここ解けた？それ教えて」と和気あいあいと意欲的にTOEIC学習に取り組んでいます。そして「これは個人で勉強することが難しい。今回はこんな勉強がしたい！」と積極的に学習したい内容を提案します。私自身もそのサポートができると思うと準備の段階からワクワクしています。

E.S.S.サークルの飯塚さんは、学習支援センターの学習相談を受けており、その中で部員の皆さんともグループでTOEICの勉強がしたいという提案がありました。そこでこの勉強会を実施することになりました。

まなびコモンズで学ぶことは授業で教わる形式とは異なります。基本的には自分で学習を進めていきます。わからないところはもちろん私たち学習アドバイザーがサポートするのですが、基本的には学生同士が教え合い高め合います。教え合うことで自分が本当に理解できているか知ることもできる空間なのです。今後もこのような活動が増えてほしいと思っていますので、皆さんの活用をお待ちしています。

センター・オフィスアワー

学習支援センターでは2005年度に開設された当初より、研究室から場所を移した「センター・オフィスアワー」を実施してきました。協創館（8号館）に移転して以降は、よりひらけた空間となったグループ学習ゾーンをセンター・オフィスアワーの場所とし、さらに多くの教員や学生の皆さんに利用されています。

元々は定期試験の時期に学生からの質問等に対応することを目的とし、長らく試験対応を中心に続けていましたが、コロナ禍以降はより幅広く質問や相談に対応できるように、授業期間を通しての運用となりました。

今年度前期は、新規の方を含む多くの教員がまなびコモンズでのオフィスアワーを実施しました。

今年はまだまたま…

商学部准教授 山中 逸郎

本学着任以来、学習支援センター主催のセンター・オフィスアワーを開いています。私は知識の積み上げが必要な理論の入門科目を担当しているため、最近では原則週一回開いています*¹。日本の標準的な中学・高校を過ごした方なら、年齢がすすむほど授業中に受講者が質問するのはとても稀になることをご存じのほうです。私の授業も例外ではありません。

受講生の疑問や質問のための時間の制約、場の空気問題その他を解決するために、オフィスアワーの出番です。

と、いいたいところですが、「質問がある人は来てください」というだけでは学生は聞きにはきません。そこで、課題を出します。するとやってくる人が若干現れます。ただし、コロナ禍の非対面授業以降、コロナが収束し対面授業再開後も、少ない訪問者が更に減りました。MoodleなどのLMSを使用する機会が増えたことにより、解答などがLMS上に公開されるためだと思えます。対面でやってくる学生も、「答えさえ知ればいい」という学生が少なくありません。

対面のオフィスアワーの場合、何故問いが解けないかについて、私とやりとりがあります。そこは、学びの足掛かりになればと思ってやっています。

さて、今年度の前期は、なぜだか突然利用者が増えました。正確に記録していませんが、実数で10名余りの学生がブースを訪れ、そのうちの5-6人はレギュラーと呼びたくなる状況でした。実施日を「月・水を隔週で交互に」と変えてみましたが、それが原因とも思えません。それはともかく、良かった点は複数人が集まることで、学生達がリラックスして質問ができたり、学生同士の対話によって学び合う環境ができたことや、学生の継続的な学習習慣には若干寄りできたことなどがあつたと思われま



* 1 2024年前期の4月是不開催。

水、いかがです？

健康科学部教授 長谷 信夫



最初にお断りしますが、この文面は学生たちに向けて記すものです。

さて、英語のことわざの中に“You can take a horse to the water, but you cannot make it drink”というものがあつます。文字通り「馬を水際に連れて行くことはできるが、水を飲ませることはできない」ということです。つまりは「やる気のない者にはお膳立てをしても何にもならない」を意味しています。

2017年春に広島修道大学に赴任して以来、授業以外で、たとえばチューターとして学生たちと接するという機会がなくなった私は、月曜日5限目をオフィスアワーとして設定していました。ですが、授業の前後に質問をする学生はいてもわざわざ研究室にまで足を運ぶものは残念ながら、ほぼ皆無でした。そして、コロナ禍。少なくとも対面で学生たちと会っていたのに、それすらできなくなった時期を経て少し考えを改めるに至りました。週に一度の授業で会うだけの教師、そういう教師の研究室の位置を確認し、出向いてドアをノックする。これは学生たちにとっては、大袈裟な言い方をすれば「ハードルが高い」のかもしれませんが。（ちなみに、こういう時に「敷居が高い」とは言いません、念のため。）

そこで今春から学習支援センターのまなびコモンズでのオフィスアワーを利用することとしました。と同時に、どの曜日に行っても誰か英語教師がいる状況が理想的だと考え、共通教育の英語科目を主に担当する同僚にも声をかけました。

話を最初に戻します。ある意味、「水場」を整えたところなんです。学生を馬に例えたいわけではありませんが、考えてみれば何事においてもそうです。自らが動かないとどうしようもありません、クラブ活動でも遊びでも恋愛でも仕事でも。皆さんは誰かに頼まれて、あるいは命令されて広島修道大学に来たのでしょうか。なかには様々な事情があるのかもしれませんが、ほぼほぼ全員、自分の意志で、だと思います。だとすれば大学そのものが「水飲み場」です。あとは皆さんがどうするか、です。期待しています。

利用者数の推移

学習支援センターが現在の場所に移転してから約10年。その間の社会の大きな変化に伴い、グループ学習ゾーンの利用者数も大きく変わりました。

下記に、【表1】としてグループ学習ゾーンを利用した学生（一部教員含む）の件数と人数を、【図1】としてセンター・オフィスアワーを実施した教員の人数とオフィスアワーを利用した学生の人数を表示しました。ここでは、具体的な数値で利用者数の変化を見ていきます。

※【表1】の学生数に【図1】の学生数は含まれておらず、それぞれ別の統計です。

【表1】 グループ学習ゾーン利用状況

年度	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	合計
利用件数	607	420	442	464	331	59	158	151	182	2,814
利用人数	3,139	1,405	1,557	1,778	1,070	102	451	435	513	10,450

※利用件数・利用人数は延べ数（センター・オフィスアワー以外の教員利用含む）

2号館2階で開室していた本センターは、2015年度に現在の協創館（8号館）1階に移転し、グループ学習ゾーンは広々とオープンなスペースになりました。移転当初の賑わいは、表1の利用者数がはっきりと物語っています。特に移転初年度の2015年度は驚異的で、翌年度には半減してしまっているものの、それでもここ数年の利用者数と比べると3倍以上の利用があったことがわかります。

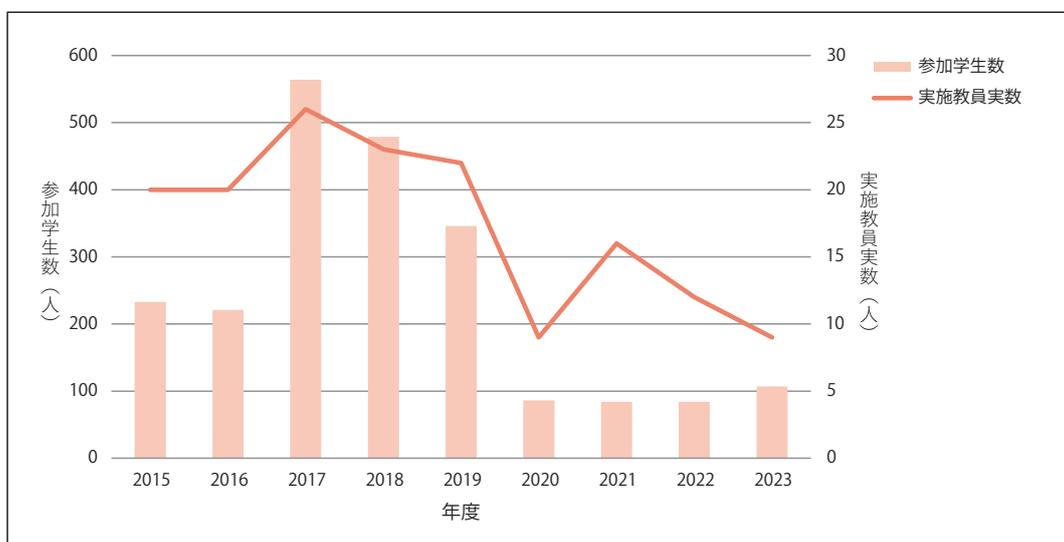
コロナ禍に見舞われた2020年度は様々な制限を余儀なくされ、当然ながら利用者は激減しました。その後、減らした席数を元に戻すなど、利用環境が完全にコロナ禍前の状態に戻るのには2023年度になってからですが、一度減ってしまった利用者は簡単には戻らず、その状態が2024年度の現在も続いているのが現状です。

センター・オフィスアワーの利用についても、グループ学習ゾーンほどの利用人数はありませんが、コロナ禍前後の変化は、同様の傾向を示しています（図1）。ただ、統計にはない今年度前期の利用者数を確認すると、センター・オフィスアワーは実施教員14名、参加学生59名とはっきり

と回復の兆しを見せています。特に教員の人数は、前期だけで昨年度1年間を上回っており、まなびコモンズという場所の認知度が上がっていることを期待させてくれます。一方で学生の利用に目を移すと教員ほどの伸びはなく、学生にとってセンター・オフィスアワーが必要とされていないのか、そもそもセンター・オフィスアワーの存在が認識されていないのか分かりませんが、学生への周知の難しさを改めて感じます。

学習支援センター主催の一連のイベントでも、参加する学生の数は思うように増えてくれません。開設から20年、移転から10年になろうとしていますが、「学習支援センター」や「まなびコモンズ」で何ができるのかという情報は、未だに学生たちにうまく届いていないのかもしれないかもしれません。学生の気質や学び方の変化を思えば、以前のように年間1,000人を超える利用者を迎える日が再び訪れるかは疑問ですが、学生・教職員の皆さんのニーズをうまく掘り上げ、まなびコモンズの更なる活用に繋がるよう、引き続き模索していこうと思います。

（学習支援センター 安田 幸子）



【図1】 センター・オフィスアワー実施状況

第78回

LSC ドキュメンタリー・アワー開催報告

LSC ドキュメンタリー・アワーとは、本学の教員が自ら選んだドキュメンタリー映像を、教員の解説と共に視聴する企画です。取り上げたテーマに対する独自のアプローチに触れられる機会になっています。

フィクションとしての写真 ドキュメントとしての物語

人文学部准教授 西光 希翔



人間は不思議な生き物だと思います。映画やドラマを見て涙する人、小説で人生観が変わる人は珍しくありません。しかし、映画、ドラマ、小説のどこかに次のような一節が必ずと言える程の確率で付されています——「この話はフィクションです」。この言葉は、

「いまあなたが見ている（読んでいる）物語は、創作物（つまり嘘）ですよ」ということを意味しています。勿論、皆さん、そんなことわかっているでしょう。しかし、なぜ現実ではないにも関わらず、人間はフィクションを求めてしまうのか。フィクションに内包される、真実や真理のようなものを本能的に観取しているのではないかと、私は考えています。人間はフィクションと共に生きてきたのではないのでしょうか。

フィクションの力は侮れません。フィクションは歴史継承の媒体（ドキュメント）にもなり得るのではないかと、という問題意識が今回のドキュメンタリー・アワーの出発点でした。私はアメリカ文学、とくにアメリカ黒人文学を専門に研究しています。アメリカ黒人の歴史と言えば、奴隷制が想起されます。南北戦争での南部敗戦により奴隷制は消滅しましたが、いまだに奴隷制を描く文学作品が生まれ続けています。これらの物語は、奴隷制の悲惨さと残忍さを読者に突きつけます。ですが、実は作者たちは奴隷制を体験していません。現在、奴隷制を直接体験した黒人は既に存在しないのです。それにも関わらず、奴隷制はフィクションの題材となり続け、時には歴史継承の一役を担っています。これは、フィクションがドキュメント的な働きを果たすことの証左となるでしょう。

今回のドキュメンタリー・アワーでは、アメリカ黒人文学と歴史の関係を概説させていただいた上で、アメリカ黒人文学研究の知見と広島歴史継承を繋げて考えてみました。アメリカ黒人文学に描かれる奴隷制は、言わば、体験したことがない歴史のフィクション化です。それが歴史を追体験させる作用があるとするならば、広島歴史継承問題にも活用できる可能性があります。原爆を体験した方の数は減少していきますので、そう遠くない将来、私たちはフィクションに歴史継承を委ねることになります。私自身、



原爆の歴史と邂逅したのは、とある有名な漫画の中でした。フィクションだと理解していましたが、言語化できない感情と恐怖に襲われました。フィクションの力を活用した取り組みも広島の高校等では開始されています。例えば、被爆者の話から絵画を制作する取り組みがありますが、これも絵画という形式のフィクションを介して、歴史を語り継ぐ営為の一つだと言えます。大学でも積極的に何か着手する必要があるように感じています。

昨今、歴史の実相を継承することの重要性が強調されています。その中でフィクションが果たす役割は小さくありません。しかし、歴史継承において、何より大切なことは、歴史に近づこうとする意識ではないのでしょうか。ある著名な歴史家は、歴史とは過去との対話である、と述べました。生きている私たちが耳を傾けようとしない限り、歴史は語り掛けてくれません。フィクションや様々な取り組みも、私たちが目を向けなければ意味をなしません。大学生の皆さんには、今一度、広島の声に耳を傾けて欲しいと思っています。歴史との対話の中で、皆さんが聞き、想像し、感じたことが、これから広島歴史を語り継ぐために必要なフィクションの種になるような気がしています。



大学教育学会 第46回大会 参加報告

- 統一テーマ：大学教育は持続可能か？～ポストコロナ、急激な少子化、AIの脅威に日本の大学教育はどう立ち向かうのか～
- 開催日：2024年6月8日(土)、6月9日(日)
- 会場：関西国際大学 神戸山手キャンパス

学習支援センター次長 馬場崎 賢太

今回の大学教育学会への出張で学ぶことができた他大学の取り組みのうち、ここでは特に自由研究発表を聞いて本学の入学準備学習、TA・SA制度に関する学習支援センターの業務改善の参考になると感じたものを報告する。まず「SA (Student Assistant) にコミュニティは必要か？」(成蹊大学 勝野喜以子氏)の発表では、SAを活用している11大学を調査した結果をもとにSA制度設計とその効果について報告された。SA制度を意義のあるものにするためにはSAとなった学生自身の成長も目的とすることが必要であり、単なるアルバイトという感覚ではなく貴重な経験をしているという自覚をSAに持たせるよう制度を設計しなければならないことを改めて感じた。そしてSA同士の交流の場を設定することによって、同じ役割や目的を持つ者同士のコミュニケーションが生まれ、SAの成長にも好影響が起ることが示唆された。現在本学でもTA・SA制度が導入され、担当教員と学習支援センターとの連携によって運営されている。今後TA・SAがより頻繁に交流・連携できる機会や場所を提供し、それをひとつのコミュニティとして成立させることができればTA・SA自身のさらなる成長を期待できるように感じた。

また、「入学前教育を入学後の学生支援につなげる試み」(清泉女子大学 有田亜希子氏)では、全学的な取り組みとして設計された他大学の入学前学習の取り組みを知ることができた。この発表では「基礎学力の補填・補強」、「学習習慣の形成・学習への動機付け」、「入学者同士のつながりの強化」の3点を入学前教育の目的として掲げてあり、その実施形態や目的は本学の入学準備学習と共通する点が多く改善のための参考となる点が多かった。入学前学習教材の進捗状況や学習回数、成績データをもとにして、入学予定の高校3年生に対してチューター面談を実施したり、入学後の初年次科目のクラス分けを行ったりするなど、入学前から学生の学力や学習行動の把握、および学生と教職員との信頼関係づくりが行われ、それが入学後の学習支援に繋がるよう工夫されていた。本学でも「入学準備ワークブック」のデータの有効活用はすでに行われているが、多様化する学生に対してより早期に、より適切に支援を行えるよう改善を続けていかなければならないだろう。

学習アドバイザー 藤田 香織

本大会の主な内容はラウンドテーブル、基調講演、シンポジウム、自由研究発表(22部会97発表)であった。

大学の進学率も間もなく頭打ちになっていくと予測される昨今、今後どのように大学は策を講じて行かなければならないかが議論された。

山梨学院大学では30プロジェクトとして3つの30を掲げている。1つ目は、留学生の割合を30%高める。2つ目は、外国籍の教職員の割合を30%高める。最後に外国語科目の開講科目を30%増やす。この3つの30である。さらに外国籍の職員が4人に1人の割合で19カ国の職員が留学生の対応を行っている。学習支援の面でもスポーツ留学生のために学習面をサポートしている。

また、共愛学園前橋国際大学では国際大学ではあるが、飛びたないグローバル(学生に国際能力を身に付ける教育を与えても、地元で就職することを目指す)をうたっている。地域の人々が先生として学生を育て、地域に貢献する学生育成を行っている。学生は小規模校ならではの学部を超えた少人数制のアクティブラーニングの教育を受けている。また昨年度から4学期制を取り入れ、2カ月のインターンシップとして地域に出る。さらに学生は自分たちで授業をデザインしているのである。また、オーストラリアで教育実習をしているケースもある。

大学の数が多過ぎるので、人口減少期に対して大学の数を減らすべきかの議論もなされた。どの先生からも大学を減らすべきではないとの返答が得られた。山梨学院大学の青山貴子氏の意見では、日本の学生のマーケットだけで考えると厳しいが、先進国の学生も含めて考えると減らすべきではない、留学生の割合をどのように考えるかで議論できるとあった。しかし留学生を数合わせだけでなく日本のグローバル化となるように迎え入れたいとの意見もあった。

韓国大学教育協議会前会長・東西大学校曹長である張済国氏は、今後、学生に力を付けていく大学を増やしていく必要があり、社会が求めている学生をサポートしていく必要があると締めくくった。

広島修道大学でも地域社会の発展に貢献できる人材の養成を行っている。今後オンライン教育の流れが益々進んでくるに違いない。人と人とが触れ合い、ぬくもり溢れ、地域の問題解決に目を向け、地域に貢献できる学生が輩出できるように学生を見守っていきたい。



LSC 資料紹介

学習アドバイザー 村田 翔

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を集めています。教職員には貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センターまでお問い合わせください。

『新しい文章力の教室 苦手を得意に変えるナタリー式トレーニング』

唐木 元著 (2015) / 株式会社インプレス



文章を書く。これを得意とする人は、おそらく少ないのではないのでしょうか。文章を書く行為そのものは、誰もが数多く経験しています。それにもかかわらず、書くことを苦手だと考えている人は多いと思います。本書の著者は、近年あ

らゆる職業の人が文章を書けない事態になっていると指摘しています。日々接している学生のレポートを見ていると、明らかに文章を書くことに慣れていないものも多く見受けられます。そのような書くことに苦手意識を持った人には参考となる書籍です。

著者の唐木元氏は、雑誌を中心に執筆・編集に長年携わり続け、ニュースサイト「コミックナタリー」の編集長として、サイト立ち上げにも関わった人物です。その唐木氏が担当したもう一つの業務に新人研修があり、新入社員に向けて、記者として大量の文章を書くためのトレーニングを指導していました。本書はそのトレーニング内容をまとめたものです。文章を書けないと悩んでいる人に対して、基本的な部分から相手に内容が伝わる文章のポイントなどが盛り込まれており、タイトルにある通り「苦手を得意に変える」ために利用することができます。

本書の構成について、第1章「書く前に準備する」では、文章を書く前の準備における注意事項等についてまとめています。第2章「読み返して直す」と第3章「もっと明快に」では、文章を書き終わった後、推敲作業をするにあたってのポイントを基礎的な注意点から、より相手に文章の意図が伝わる言葉の使い方や添削すべき箇所等を数多く記載しています。第4章「もっとスムーズに」と第5章「読んでもらう工夫」では、これまでの文章を読みやすくする、あるいは興味をもつ文章にするためのヒントを

様々な文章例から紹介しています。

本書で「良い文章」について著者は「完読されるのが良い文章 (p.14)」と定義づけています。近年、SNSなどを中心として短文に慣れ親しむ機会が非常に多くなっていることから、どのようにして文章を飽きることなく最後まで読んでもらえるか、熟考しながら文章を作成する必要があります。そのために、実際に書いていく中での事前準備の重要性を細かく説明しているのが特徴の一つです。

また、別の特徴として、文章を書き終わったあとに読み返して直すための視点を提示しています。先述した構成のうち、第2章と第3章がまさにこの特徴に当てはまります。適切な接続詞の使い方や言葉同士のつながり方、係り受けの関係性など、文章を見直すうえで有益な情報が数多く述べられています。これらの情報を理解し、活用することで、自分自身で文章を見直し、読み手に対して効果的に伝わる文章を作成することができます。

本書の情報を活用して文章を書く力が上がってくると、「文章力にとどまらず、あなたの仕事力全体の向上が図れるであろう (p.170)」と筆者は述べています。文章が書けるようになると、相手に考えが伝わりやすくなり、円滑な業務遂行にもつながります。単に文章と一言で表しても、ニュース記事やプレゼンテーション、企画提案書など様々な種類があり、私たちは何かしら書く経験をするものです。第5章では、様々な文章に対応するための文章の構成やレイアウトなどが紹介されており、初学者に加えて、改めて文章を書く力を習得したいと考える人にも参考になると思います。

文章を読んでももらえる、すなわち完読してもらえるためにはどういう点に注意するのか、見直しをするためにはどこに着眼点を置けばいいのか、読者に対して有益な情報を提供してくれる一冊となっています。

新任学習アドバイザー 挨拶

学習アドバイザー 藤田 香織



私はこれまで、高校、専門学校、大学、英会話スクール、塾で英語を教えていました。年齢も学習目的も国籍も様々な方達と出会い、心震わせて毎日をご過ごしていました。

塾での学習を終えた小さな子供たち、子供に英語を教えたいというお父さん、資格試験取得を目指す老婦人、様々な方々との出会いが私の背中を強く押してくれました。英語を勉強することで、このような人たちと出会うことができました。これから広島修道大学でたくさんの方と出会えるのを楽しみにしています。

私が英語学習を始めたきっかけは中学生の時です。現在では小学生から英語を勉強しますが、当時は中学校で初めてスタートする科目が英語でした。小学生の時に得意科目の無かった私にとって、得意科目をつくる良いきっかけとなったのです。担任の先生に毎日見せる連絡ノートが

あったのですが、そこで載せる日記を英語で書いていました。しかし、よく「I'm tired.」と書いて叱られたことを覚えています。

それでも英語が好きになったのは、英語が通じた時の感動が忘れられなかったからかもしれません。大学院での研究で、英語を話すことに抵抗のない大学生にインタビューをしました。そこで共通する経験に「英語が通じて嬉しかった」という点がありました。つまり小さなきっかけが自信となったのです。私は海外を旅するバックパッカーですが、もし初めて英語を話す時、ALT（外国人指導助手）の先生が根気強く受け答えしてくれなかったらきっと英語を話すことを楽しめなかったです。ですから当時のALTの先生に感謝しています。私は皆さんと対応する時に英語に少しでも興味をもってもらえるような学習アドバイザーを目指しています。

語学学習はインプットするだけでなく、アウトプットする必要があります。ただ単に単語を覚えても使わなければ忘れやすいのです。しかし、覚えた言葉を使って話をすれば、自分のものになります。私とその相手になれたらと願っております。

<学び★サプリ>

2024 Vol. 26

運を味方にする

学習支援センター長 松川 太一

『その幸運は偶然ではないんです!』の著者たちは、人生の目標を決めて将来のキャリアを考えたとしても、自分が望む仕事をみつけられるとは限らないと言います。たしかに過去に自分もっていた目標や夢を実現できた人ばかりではないし、たとえ目標や夢を実現できたとしても突然の病気・事故・災害などで思いどおりにならないかもしれない。つまり人生には「想定外の出来事 (unplanned event)」が多いということです。

では、私たちは何もできず運に身をまかせるしかないのでしょうか。そうではありません。著者たちは、行動することによって「想定外の出来事」から幸せをつかむことができると主張します。本書のタイトルにもあるように「幸運は偶然ではない (Luck is No Accident)」、幸運は自分の行動によって作り出すことができると言うのです。

本書の背景にはプランド・ハプンスタンス理論 (Planned Happenstance Theory) があります。私たちの身のまわりには自分のキャリア形成に役立つ人との出

会いや機会といった「想定外の出来事」がたくさん存在しており、意識して行動すればその存在に気づく可能性が高くなるという理論です。逆に言えば、キャリア形成に役立つ人との出会いや機会が存在しているにもかかわらずそれに気づくことができないとき、私たちは「自分には運がない」と言っているのです。

ただし、どの「想定外の出来事」が幸運をもたらすのか事前に知ることはできません。だからこそ、できるだけ多くの「想定外の出来事」と出会えるよう行動することが、幸運をつかむには重要です。本書では、大学への再入学や大学院への進学が幸運につながった事例が紹介されています。将来、「広島修道大学で幸運をみつけた」と人生をふりかえることができるように、学生のみならずはいろいろな物事に興味をもって行動してみましょう。

参考：J.D. クランボルツ、A.S. レヴィン（花田光世、大木紀子、宮地夕紀子訳）（2005）『その幸運は偶然ではないんです!：夢の仕事をつかむ心の練習問題』ダイヤモンド社。



LSC NEWS LETTER
Learning Support Center
広島修道大学
Hiroshima Shudo University

発行日 2024年10月31日

発行者 広島修道大学 学習支援センター

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1 TEL.(082)830-1426

E-mail gshien@js.shudo-u.ac.jp

©LSC NEWS LETTER は大学公式WEBサイトでもご覧になれます。